タイトル：「遼・金・西夏に関する総合的研究―言語・歴史・宗教―」（平成21年度第2回研究会）
日時：平成21年12月5日（土曜日）午後1時30分より午後5時30分
場所：AA研マルチメディア会議室（304号室）

1)
報告者名（所属）：白石典之（AA研共同研究員，新潟大学）
報告タイトル：「魚兒泊（濼）」再考―金元期におけるモンゴル高原東南部の歴史地理―
報告要旨： 本報告では、金元期の史料上に散見でき、モンゴル高原東南部にあった「魚兒泊（濼）」が、現存の何という湖に相当するか地名比定を行い、その結果が、当該期の研究に如何に寄与するかの展望を述べた。

「魚兒泊（濼）」は『長春真人西遊記』『張徳輝嶺北紀行』『元史』などに登場し、金中都・元大都があった華北平原と漠北とを結ぶ交通路上に位置したことが知られている。19 世紀末からの先行研究で、その位置は、現在の内モンゴル自治区赤峰市ケシクテン（克什克騰）旗にあるダリ湖（達里諾爾）と考証され、今日では定説化した（以下「旧説」）。

しかしながら、報告者は、史料の精査、現地踏査と衛星写真に基づく歴史地理的調査、考古学的一般調査の成果の基づき、内モンゴル自治区シリンゴル（錫林郭勒）盟アバガ（阿巴嘎）旗のコルチャガン湖（呼日査干諾爾）こそが「魚兒泊（濼）」であるという新説を提示した。そのおもな根拠は、湖の規模・形状や、湖までの旅程が史料と一致すること、湖畔に金元期の遺跡が存在することである。当時の旅行記に書かれた漠北への旅程は、旧説に拠った場合、東へ大きく迂回しなければならず、不自然であったが、この新説を採用することにより、スムースに直線的に華北平原と漠北とを結ぶようになった。

今回の考察の副産物として、明・清代にも、コルチャガン湖は京師（北京）と漠北とを結ぶ交通路上に位置したことが判明した。長きにわたり、交通の要衝としての役割を果たしていたものと想定できる。これもまた新説を傍証するものといえよう。

モンゴル高原東南部は、金代には遊牧諸民族との和戦両面での交流の舞台、元代には外モンゴルと上都・大都を結ぶ幹線駅道（テレゲン[帖里干]道）が通り、強力な軍団や軍馬牧場が置かれるなど政権を支える要地であった。だが、それらの実態は明らかになっていない。今回の考察を通して、「魚兒泊（濼）」だけでなく、当地方の歴史地名比定の先行研究の多くに、誤りがあることが明らかになってきた（後考で詳述する予定）。

脆い砂の上に、いくら堅固な楼閣を築いても意味はない。今回行ったような地名比定といった基礎的な作業が、金元時代史研究において、顧みられるべきであろう。

2)

報告者名（所属）：森部豊（AA 研共同研究員，関西大学文学部）

報告タイトル：7～10世紀の北中国史研究と石刻史料

報告要旨：　本報告では，7 世紀から 10 世紀の北中国（唐から宋代初めの華北地域＝河北省・山西省・陝西省）の歴史は，当該地域に関する伝世および新出石刻史料を利用すると，何がどこまで明らかになるのかを，フィールドワークの成果を踏まえて報告した。

河北地域は，755 年に勃発した安史の乱の舞台となる地域である。安禄山・史思明がソグド系であることを考慮した時，安史の乱以前の河北地域におけるソグド人の活動状況を明らかにすることが必要となるが，従来の研究では，十分にそれが検討されてきたとは言い難い。それは，編纂史料からはほとんどうかがい知ることができなかったからであるが，石刻史料の利用により，それが可能となる。その結果，安禄山が登場する以前の河北には，恒州（河北省正定県），定州（河北省定州市），幽州（北京市）にソグド人聚落が存在したことが確認できる。

安史の乱後，河北に成立した盧竜・成徳・魏博の河朔三鎮も，従来の編纂史料を駆使した研究においては，その実態が具体的には浮かび上がらなかった。石刻史料を用いると，この河朔三鎮においてもソグド軍人の活動を確認でき，さらに彼らの系譜・規模が明らかになる。彼らは安史の乱後に，オルドスから新たに河北へ移住したソグド人あるが，とりわけ藩鎮魏博の軍事力に大きな影響を与えたことである。魏博に移住したソグド系突厥は，ついに彼らの集団から節度使を選出するに至る。

ところで，9 世紀の終わりころから，山西北部で沙陀族が勢力を急激に伸張してくる。その沙陀にも「薩葛」や安慶」というソグド人集団が従属していたことが編纂史料から明らかとなる。石刻史料からは，「索葛」が実在し，その構成員がソグド姓をもつ者であったこと，「索葛」は編纂史料では，唐末で姿を消すが，墓誌銘の記述から，後晋時期までは確実に存在していたことが判明する。

このようなソグド系突厥集団が，10 世紀にどうなるかは，編纂史料では，追い切れなくなる。しかし，河北省定州市博物館が所蔵する宋代石函の銘文には，ソグド姓を持つ吐谷渾軍人の存在を確認することができ，ソグド人を対契丹防衛の最前線に配置していた北宋王朝の性格を垣間見ることができる。

本報告に対し，ソグド系突厥という集団のアイデンティティーはいかなるものか，漢化というものをどうとらえるのかといった質問が出された。ソグド系突厥は，「農業・牧畜接壌地帯」において，遊牧に近い形態で生活していた。この間においては，ソグド姓を持つ者同士の結びつきが非常に強いことが確認できるが，一旦中国本土に移住し，各地の政権に従属すると急激に漢人と婚姻関係を結んだり，漢文化的教養を身につけるようになり，漢化していく様が見て取れるのである。